
我が子はライオン

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が子はライオン

【Nコード】

N0288S

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

我が子は来音。ライオンと読みます。

彼は私が産みました。でも彼は自閉症なんですよ。

認めたくなくても病気？というかこの苦しみ。

子育ての悩みはたとえ健常児であっても尽きないというものの、私だって悩みは尽きない。でもライオンはわたしのかわいい男の子！親と子の楽しくもありつらくもある短い子育て話。4話完結です。読んでこう思えとか思っただけのほしいとかいうのではないです。念のため。

（子育てには、完結っていうものはないと思います。正解もお手本もない。ただ上から目線の教育書や教育者、指導者ってマジ腹立ちますねー・・はつきりいって嫌いです。というわけで関係者にはなんじゃこれは、でしょうが）

第1話

あたし、久留巳桃実の一人っ子の男の子は来音という。ライオン、と読むのだ。彼は広汎性発達障害の5歳の男の子だ。これにも症状と言うか個性と言うか学問的にいろいろと区分があるらしいが、一番わかりやすい言い方は「自閉症」と言う言葉だろう。

3歳のときに正式な診断があり、4歳になったときに療育手帳を住んでいる町の役場からもらった。これはいわゆる子供版の「障害者手帳」だ。

この手帳をもらうまで、あたしはここまでくるのに、どれほど泣いただろう。またこれからもどれほど泣くのだろうと思った。

療育手帳は住んでいる市町村によつてはデザインが違うらしいが根本的には一緒だ。住んでいる市のマークが箔押しされていて裏表紙が透明のビニールが貼っていてかわいい来音の写真がある。この目が覚めるようなブルーの色の小さな手帳をもらうまでに桃実は本当にたくさん泣いた。泣いて泣いて泣きまくった。泣く・・・泣いてもものが解決するならいくらでも泣く・・・あたしははため息をついた。

一生忘れられない陣痛の痛み、48時間痛い眼にあってやっとうまれたあたしの来音。元氣一杯の泣き声にどれだけ安心したか。来音が生まれた後すぐに携帯電話で夫、卓郎に知らせたらとび職の仕事着のままできてきた。汗びっしょりになって、目は子供が生まれた喜びに輝いて。

「おい、桃実。世界一かわいらしい男の子だな！」

この誇らしげな声は一生忘れられない。卓郎ったら来音の顔を見て男泣きに泣いたらしい。ホントあの時は幸せだった。

泣き声はこの前後に生まれた赤ちゃんの泣き声の中では一番やかましくうるさかった。産院の中でも来音の泣き声はすぐにわかった。

ほえるような赤ちゃんらしくない「うぎゃああつ、うおおおおおおうっ！」すぐに有名になっちゃった。そういうことで有名になるならいくらでも歓迎だ。

結局泣き声から連想して強く百獣の王になれ、という意味で「来音」ライオンと名付けた。母や祖母はそんなへんな名前はかわいそうだと大反対だったが平気だった。だって私達が産んだから私達が好きな名前をつけるのは当然だ。

しかし来音はちょっとへんな赤ん坊だった。視線があわない。おとなしくてすぐに寝付く。かと思うとそっくりかえってこの世の終わりかと思うほど泣きわめく。赤ちゃんのくせに破壊力のある迫力のある泣き声だ。赤ちゃん雑誌の成長記録と見比べてどうも何となく違う。だけど来音は体格も良くて保健師さんにほめられるくらい元気な赤ちゃんだった。

「でもちよつと目線があわないね。様子をみましょうね」

すでに3カ月検診で言われた私達。母も祖母も何となくこの子へんね。言われるたびに私はウルセーだの親に怒鳴っていたけれどでもやっぱりへんなのがわかってきて落ち込んだ。

このあとはもういいたくない。省略！育児雑誌とかパソコンでもいいや、自閉症を検索してみてくださいな。いっぱいヒットするかぜひ見てくれ。ま、どーでもいいや。

あたしがここでもいいたいのかってのはどんな子でもあたしは自分の子がかわいいの！

来音は世界一かわいい男の子、だよ！あたしと卓郎のアイの結晶なんだい。文句、ある？

だけど、ね。ここであたしが書くのはやっぱり落ち込むから。

来音は5歳。とてもとてもかっこよくてどこかの子役よりもずっといい。ただしそれは・・・黙っていれば、の話し。じっとしていれば、の話。

来音ははっきりいって自己中心。マイペース、わがまま。癪癪を

おこすともう誰がなにしてもどんなになだめてもダメ。なにかで怒りだすともうダメ。暴走する。周りの人をひつかいたりする。

療育？　いつてるわよ。もちろん行くわよ。マシになったかって？　何が？　何がマシなの？　どういいうのが普通で何かマシなの？　ああ・・、ごめん。あたしケンカするつもりはないの。でも来音のことを考えると心が乱れるの。何が悪かったのか、何がどうなってどうして来音がこんな子なの？　とか思うの。

自閉症って昔で言うときチガイ？　はっきりいうわ。何かのタタリとか、そう思う時もあるの。ちょっと前までは母親のせいとか言われてたらしいな。来音のあたまのどっかの機能がこわれてる、こわれているのは生まれつきでなおせない。医者にだって親にだって、神様にだってなおせない。

悲しいな。そしてくやしい。悲しい。

来音が悲しい。親子心中する人の気持ちかわかる。

第2話

保育園にはやっている。私だって働かないといけないから。仕事はスーパーのレジ打ち。午前中だけね。勤務先のスーパーはすぐくはやっていて昼前なんかお惣菜をかごの中にいれたお客さんがずらーと並ぶことがある。

保育園はごくごく普通の保育園だ。来音は自閉症なので「かはい」という市の方から特別に手配してくれた先生がいるが別につきつきで世話してくれるわけではない。かはいというのは「加配」と書くが自閉症や肢体不自由児の児童も受け入れているが3人に1人の割り当てがあるらしい。市町村によって違いがあるらしいが問題はその加配の先生が休んだりすると保育園は通常の態勢では来音の面倒をみきれないので休んでくれとか言われることだ。怒っても仕方がないしこの保育園以外の自宅徒歩3分の幼稚園なんかけんもほろろの応対だったし入園させてくれるだけでしたと思ってあきらめている。

来音は保育園が好きでも嫌いでもないみたいだ。最初は慣れなくて最初から最後まで泣きどおしだったらしい。そのうち自分のお気に入り場所を決めたらしくそこから出てこなかったり（気に入りの場所ベスト3は園長先生の机の下、遊び道具入れの押し入れ、うさぎ小屋のアミの後ろ。いずれも出ておいでと言うと怒るらしい）何かを夢中でしていると誰が何と言おうとやめなかったり。

問題は何か無理強いをすると来音があばれることだ。人をたたいたりひっつかいたりする。つきとばしたりもする。4月生まれなので他の子よりは大柄に見えるから怖がられたりもするようだ。

家庭と保育園お互いの様子を知らせあう連絡帳には来音がああした、こうしたとの情報がびっしりある。母親の私が帳面に書く言葉をもとにしたら保育園側は9ぐらい。自分的にすみませんと書く言葉が非常に多い。ああ、またかとうんざりもする。だが先生はこま

めに書きこまめに教えてくださる。ありがためいわくをいう言葉がちらちらすることもあるがちゃんと聞いて反省というものを少しはさせないと退園にでもなったら大変だ。

ある時いつものようにレジをうっていたら「電話です」と呼びがかかった。お店にまでかかってきたのははじめてだ。ふつーは熱が出たのか？と思うのかもしれないが来音の場合「また誰かを怪我でもさせたのか」と思ってしまう。

そう、今日の場合は来音が滑り台の上から1つ下の女の子を何もいわずいきなり突き落としたそうだ。骨折ではないですがでも腕にひびが入りましたので・・・と先生が申し訳なさそうに言う。要は来音も興奮していていうことを聞いてくれない、だから迎えにこいと。そして相手の親に一言謝りに行ってください・・・と。そういうことだ。

先日もこういうことがあった。バスに乗る。来音はバスが好きだ。しかしバスに乗ってくるお客さんが多いときは不機嫌になる。バスから降りるときに私も気をつけていたが2つぐらいの男の子を何も言わずに突き飛ばしたことがある。男の子は当然泣く。相手の親は抱き起こしてこっちを睨む。それも当然だ。私も間髪をいれずに「すみません」とあやまる。これも当然だ。

来音はその間も知らない顔だ。見た感じ来音はまったく正常で普通の男の子だからA D H Dとはわからない。親のしつけが悪いと思われるわれていそうでつらい。

私は来音のことがあってから髪を黒色に戻し、気合いの入った洋服とかは買わないようになった。そしてごくごく目立たないふつーの服を着るようになった。ふつーの服ではTシャツにジーンズ、エコバッグ。私は元々気合いの入ったちょつとヤンキーぽいおしゃれも好きだったがただでさえ、来音のことで目立つのにこれ以上目立ってどうする？と言う感じだ。

ライオンのせいともいえるがそれで私は、だんだん地味で目立た

ない本当のおばちゃんになってしまった。それはちよつと悲しく思う。

第3話

今は来音は小さいからいい。こっちへおいでといっても来ないときは抱きかかえることもできる。あばれるがまだ子供の力だ。大したことはない。

でも今の話だ。

来音が大きくなったらどうしようと思う時もある。パパに似て体格が普通以上に大きくなったら……。こっちへおいでといって腕をひっぱってもびくともしなくなるのではないか？

そういうときはどうしたらいいのか……。私は将来のことはなんとかなる、と思ってはいるけれど実は何とかならないかもしれないとも思う。

先日こういう夢を見た。みなさん、聞いてください……。

どうやら私はみんなに責められている……。まわりに人がいっぱいいて私を指さして軽蔑の視線をよこしてくる。ののしっている。私は一体何をしたのだろうか……。？

どうやら来音が何かをしたらしい。それも大きな事件を起こして死人をだしたらしい。私は来音の産みの母親と言うことで裁判所か、警察かわからないけれど判決を下されるらしい。

「・・・来音くんは何の罪もない小さな子供もお年寄りも関係なく人を殺してしまいました。理由もいけません。通り魔をしたのです。あなたは来音くんのお母さんですね？一体あんな子をどうやって育てたのですか？みんな親の顔が見たいと言っているので見せてやりなさい」

「そ、そんな。来音が人殺しなんか……。殺人なんかする子ではありません！何かの間違いでは」

「お母さん、来音の顔と手を見なさい」

来音は大きくなっていた。子供のはずの来音が私と同じ背丈の大

きな大人になっている。だが、それは来音ではなく来音に似ている誰かだった。

その来音に似た男は口の周りがまっかだった。ケチャップ・・・？いいえ、それは血のようだ。

その来音に似た男の手は血で真っ赤だった。シャツも血で染めたように真っ赤だ。髪も真っ赤だった。私を見ると哄笑した。

ゲハハハ、ワハハハハッ！

私の目から涙が出てきた。

「来音、どうして人を殺したの？あんたはやさしい男の子だったじゃないの？」

ワハハハ、ハハハッ

みなが私と来音を指さして嗤っている。嗤っていないひと塊りになった人たちはどうやら来音に殺された人の家族らしい。軽蔑のまなざしと憎しみをこめたまなざしと。

ああ・・・。私は来音を産んだという罪をおかしたのか。

しかも人殺しをしたというのに来音には罪の意識がないようだ。

私は来音の代わりに罪をつぐなわないといけない。死んでお詫びをすべきか、来音を殺して私も死のう。

それには、それをするためには・・・ああ、ああ・・・。

「おいっしっかりしろ！」

いきなり私はゆさぶられた。夢だったのだ。夢でよかった。

私はゆっくり起きた。ダンナの卓郎が心配そうな顔でのぞきこんでいる。

「うなされていたぞ。ごめんなさい、ごめんなさいっていったぞ」
私はため息をついた。

「・・・。来音が人殺しした夢を見たの・・・」

「あゝ、なんか人を怪我させたとかでそんな夢見てしまったんだろ。まだ3時だ。寝よう」

「・・・、私はどうしたらいいのだろう・・・もう耐えられない」

「俺明日早いから寝かせろよ。それにそんな話は今にはじまったんじゃない。ひどくなればどこかの施設に入れればいいだけの話だし、その方が俺達家族にとっていいならそうしたらいい」

「来音と離れ離れになるのはイヤ」

「まあ、とにかく寝よう」

「あんたは気楽でいいよね、働いて食べて寝て。ライオンの苦情なんか聞いたり療育へ連れていくのはいつも私の役目だし。睨まれたり親に謝りに行く羽目になるの、いつも私だし」

「いいから、寝よう。俺寝不足になると困るよ、仕事にさしさわりが出ると困るし」

「何よ、お気楽主義！」

「ケンカふっかけんなよ。大体、お前おもしろくないぞ。いつも来音のことで難しい顔ばっかしやがって。昔のはじめてた明るいかわいなお前はどこいったんだ。黒い髪をしてばくさい田舎くさい変な格好しやがって、かわいくねえんだよ。キャバの姉ちゃんの方がよっぽどいいや」

「キャバ・・・行っただの？」

「いや・・・だいぶ前の話だよ。だけどお前がおもしろくないんだ」

「ひどーい。キャバ行っただ。お酒飲んできたんだ、どうも最近遅いときがあると思ってたら・・・ひどい！」

「前の話だってば。もういいや、どうでもいいや。寝よう」

「寝かせるもんか。あんたなんかひどい、大嫌い。あたしばかり嫌な目にあわせて。来音がこんな子になったのは共同責任じゃんか」

「来音は生まれつきって医者が言っただろ。もういいや、来音も前もいいや、いい加減うざいんだよ」

卓郎は突然ばさっと起き上がり、毛布を丸めて立ち上がった。

「どうにでも寝かせてくれないなら、車の中で寝るよ」

私は行かせまいとして卓郎に立ち向かうが軽くあしらわれる。そしてドアをばたんとして行ってしまった・・・。行ってしまった！私は呆然として布団を抱きしめた。

来音はいつの間にか起きてコンセントをばちばちを付けたり消したりしている。

「来音、やめな！寝よう」

私はいつそ来音ごと首をしめて一緒に死のうかとも思った。でもそれは以前もあったことだ。いちいち言わないけど、そう思うこともあった。でもやめたんだ。ばかばかしいから。

でもばかばかしいとわかっていてもあんな夢を見るのはやめられない。ばかばかしいとわかっていても来音が他害児であることはやめられない。これから他の子供を怪我させたりすることはありうることだ。療育の効果が出て少しはましになったとしてもこれからもしかしたら殺人者の親になることもありうることなのだ。さっき見た夢は正夢になる可能性があるのだ。

私は頭をかかえた。私の人生はこんなはずではなかった。

来音は私の苦悩も知らずさっきの夫婦喧嘩も知らん顔して今度は冷蔵庫の中のジュースを取り出して飲んでいいる。彼は紙パックの決まった銘柄の決まったジュースしかのまない。1本飲みきると来音は丁寧に折りたたんで丁寧にゴミ箱の中に安置する。

この子は一生こんなだろう。自分で決めたこたわりから抜け出せない。私はこの子から抜け出せない。私達は一蓮托生だ。親子心中する人たちも気持ちいが痛いほど私にはわかる。

前に精神疾患のある人が子供を殺したことがある。でも無罪になったんじゃないかな。無罪は無罪。キチガイは何しても無罪。でもそうじゃないだろう。本人には罪の意識がなかったとしても本人には家族がある。家族はどんな思いで判決を聞いたのだろう。そして殺された人の家族もまたどんな思いだったのだろう。法律はそれで解決したが当事者にとってはそれはそれで解決にならない。当事者は加害者でもあるし、被害者もある。本人ではなくその家族も当事者になる。その友達もその親戚もみんな当事者になる。そしてみんながつらい思いをするのだ。本当の解決は最初から出会わな

かったことにつきるのじゃないかな。事件が起こらないこと、当事者にならないことが、こういう思いをしないことが解決じゃないのかな。

昨日来音が怪我させた女の子の親は「仕方ないですから、」と言って許してくれたがでも私達はそれで終わりじゃない。来音も私もこれからずっとこの世で生きていかなきゃならない。

私本当は「仕方ないです」と言われたくなかった。ううん、怪我させてしまった側を責めているのではないの。あちらもそう言うて怪我した女の子を慰めるしかなかったと思う。ただそう言われるしかないのかって悲しくなったの。「仕方がない」では終わらない。「仕方がない」では解決ではない。でも産まなきゃよかったとは思いたくない。来音だって何か生まれてきて意味があるはず。来音だって人間だ。

来音が他害しないように療育ももっと引き締めるべくきちんとしてもらわないといけない。私も気をつけないといけない。来音には何もわからないのだから。この子は他人の痛みとか苦しみとか理解しにくいという障害がある。ああ、障害。「障害」ってなんていやな言葉、嫌な響きをするのだろう。

障害、こう書くともう決して治らないぞという、一生このまま背負うべくつらい運命という響きがずんとする。なんて嫌な言葉。障害・・・。障害。

そして「自閉症」というお言葉。これ、誰の発明？なんて当を得たすてきなネーミング。でも嫌だ、嫌だ。私は嫌だ・・・私の目に涙があふれでる。夫のいないからっぽの布団に身体を横たえて私は泣いた。

私はこんなことを考えながらまた寝たらしい。起きるともう朝の8時だった。

「いけない」

私は働かないといけない。来音のために、生活のために。

大急ぎで支度して来音をひっぱって保育園に放り込んで・・・来音は毎朝の手順がまったく違うので吠えたが、・・・訂正。泣いたがそんなことを言っただけでなく遅刻しかけの時間だったのだから来音をはがいじめにして連れて行く。暴れたので私の腕にみみずばれが4、5本、脚の膝に青あざが2、3個できたが仕方ない。

職場にはぎりぎり間に合ったがタイムカード近くの鏡の中の自分にぎよっとした。

寝不足の髪がぼそぼそでまるつきりおばさんの自分の顔。朝から不機嫌でちよっと泣いたかとも思われるような腫れぼったい目にへの字をした口元。・・・ちよっと反省した。

第4話

それで私は反省した。猛反省した。

ちょうど給料日だったので美容院へ飛び込んで黒髪から茶髪へ元に戻してイケテルはやりのスタイルにした。洋服も買ったかったがそれは我慢して押し入れの段ボール箱から昔の服を出す。

身体のラインを強調した服だ。産後、肥ってしまったので着れないかも、と心配だったがぎりぎりOKだった。メイクも古いのしかなく、今年発売の新色なんか買えないけどないよりまし。昔のでもノーメイクよりも色が付いていればいいだろう。そうしているとちよつと気分が晴れやかになった。

けばけばまつ毛にもしたかったがマスカラはもうカラカラに乾いていてそれはできなかった。まあいいや。リップはOK。ちよつと赤目にレトロな感じに仕上げた。

それからかかとの高いブーツを出してきて履いた。安物のフェイクの皮なもんでかはがれかけてたし、ちよつとカビみたいなのがついていたがとにかく履ければいい。とにかくローヒールのおばさんスタイルはやめよう！だって私はまだ20代前半だし、若いんだし。まだおばさんじゃないと思ってるし。

その格好で保育園でライオンを迎えにいったら先生は驚いていたが来音は喜んで私のそばによつてきた。そして私の服についていたチェーン（昔流行ったやつ）をひっぱって声を出して楽しんだ。

「来音、いいでしょ！この服ママは昔来てたヤツ。ママは昔イケテタ女の子だったのよ！私はまだ若いんだから、これからもイケテルママになりたいな！」

私は声にくそ恥ずかしいので出さなかったが確かに私は世間体を重んじていたがもうやめようと思った。でも園長先生は反省の色がないとでも思ったのだろう。だって昨日の今日で昨日よその家であやまりにいった親がこんな目立つ派手な恰好をして当の子供を迎え

に來たのだから。渋い顔をしていたが私は知らん顔をした。だってこうでもして気晴らしでもしないと本当に私はつぶれてしまう。私が楽しければ来音もホラこうして楽しい顔をするでしょう？

それから来音の手をひいて駅前通りまで遠回りをして綺麗なイチゴがたくさん入ったケーキを買った。私は綺麗に配色されたフルーツのケーキが好き。そしてこのケーキは甘さがしつこくなくてあっさりとしていくらかでも入る。気に入りの服を着て意気揚々と店内に入ると顔なじみのパティシェさんが「おお」という顔をしてにっこりしてくれた。

私達を振り返ってみる人もいる。このあたりには私のように気合いの入った服を着る人はあまり見かけないから珍しいのかも。でも来音が変なことをして「なに、あの変な子」と振り返られることを思えば、気分が委縮することを思い返せば今の気分の方が何倍もいい気分だ。

来音は私の感情に敏感なのか終始ご機嫌だった。大人しく私の後についてくる。いつもはすぐにどこかへ行って迷子になるのだが今日にかぎっては大丈夫だ。

家に帰って2人でケーキをぱくつく。
すると卓郎がひょっこり帰ってきた。

「おっケーキか。えっ、お前桃実かあ。懐かしい服だなあ」

卓郎は明け方ケンカしたことを忘れたような顔をして私をほめた。私は知らん顔して1個だけ残しておいたケーキを卓郎にすすめる。濃い目の珈琲も大サーブスで入れてやった。

卓郎はまぶしそうな顔をして私を見つめた。もう何年かぶりのその表情。そう、私は確かに卓郎に惚れられて結婚したの。だからいつでも綺麗なままでもいい。がっかりさせたくない。

私は来音の母親。そして卓郎の大好きなお嫁さんでいたい。

私は確かに「自閉症のあの子」の母親だ。だけどその前に桃実という名前の女の子でもあるの。

どうしてこんな簡単なことがわからなかったのだろう。

落ち込むのは簡単だ。解決しないことでくよくよ考え込むのも一番簡単だ。そして時間はすぐにたつ。

どうせならば単純思考で明るく楽しく生きていたいよね。

2人でそう話しあっていると来音がよってきた。

そして私達の足元に座って絵を描いている。楽しそうに絵を描いている。私達は来音の絵を眺めてふふつと微笑む。

いつのまにか仲直り。

今日はこれで解決、とはいかない。来音はまだ小さい。そしてこれからもずっと一緒に暮らす。

保育園へ行くのも療育へ行くのも母親としての私の仕事。終わりのない子育て、終わりのない自閉症児の子育て。大変だろうと人は言うかも。でもこれも日常生活の一環でこういうもんだと思ってるから上から目線で大変ねえとか言わないでほしい。お母さんががんばってね、とかいうのもマジやばでやめてほしい。あんた何さま？

泣いたり怒ったり。そして今後も来音のことで落ち込んだりすることもあるかと思う。でも落ち込むだけでは解決しないから。私と卓郎、そして来音。3人の人生はまだまだ続く。

自閉症ってまだまだわからないことも多い。だけど療育や保育園の先生は私達の敵ではない。病院の先生だってそうだ。療育仲間のサークルだってある。

利用したことはないが預かってくれる施設だってある。療育って受ける人たちは実はかなり多い。来音みたいな子は多い。来音みたくでなくとも肢体不自由児や知的な障害のある子も多い。おじいちゃんおばあちゃんになると呆けのある人だって多い。病院だって病気のひとばかり。

嫌なことを言う人や自分でわからずに嫌みを言うやつは病氣や障害の持つつらさを知らない人だと思う。これはあわれで不幸なひと

だと思う。ほっとけ、ほっとけ。気にするだけ損、ソン。

これからだって生きていく。そうして折り合いってのをつけて楽しく生きていきたい。こう私は思うの。

来音や、母ちゃんはがんばるよ！

卓郎、ごめんね。（でもキャバクラ行くのはやめてよね！）

そいで今度今年はやりのあの服がほしー、買ってよねー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0288s/>

我が子はライオン

2011年3月31日18時40分発行